OUHS
OSAKA UNIVERSITY OF HEALTH AND SPORT SCIENCES
スポーツ
大体大
第38号
発行責任者
大阪体育大学広報室
室長　大坪康巳
編集長
大阪府泉南郡熊取町朝代台1-1
電話（072）453－7021
FAX（072）453－8818
協力＝教育後援会・学友会

写真提供　© JDCC

北谷宏人 金メダル

夏季デフリンピック初出場 棒高跳び

教育学部２年

陸上競技部

４年に１度開かれるろう者の国際競技大会「第24回夏季デフリンピック」（５月１～15日、ブラジル）に陸上競技部の北谷宏人（教育２年）が初出場し、男子棒高跳びで４メートル20を記録し金メダルを獲得した。「試合の後、たくさんの『おめでとう』をいただき、『耳が聞こえない自分を誇りにしていいんだ』と思えた」。次回の2025年デフリンピックは日本開催の可能性がある。「未来のデフ選手に夢を与えられるようなプレーを見せたい」。高い志で２連覇を目指す。

５月10日。棒高跳び決勝が行われたブラジル・カシアス・ド・スルは大雨。試合ができるかどうかも分からない悪天候だった。そんな中で北谷は「応援に来てくれた仲間が励みになった」という。記録の４メートル20は悪天候が響いて満足のいく内容ではなかったが、初出場初優勝を果たすと、ずぶ濡れの中で目の丸を両腕いっぱいに掲げた。

北谷は、大阪・大塚高校体育科に入学してから本格的に陸上を始めた。高校３年だった2020年、日本デフ陸上競技選手権の棒高跳びで優勝、100メートルで２位に入った。世界大会は、2019年世界デフ室内選手権（エストニア）、2021年世界デフ選手権（ポーランド）の代表に選出されたが、いずれもコロナ禍のため中止になり、世界大会はデフリンピックが初めてだった。

大阪体育大学に進んだのは、本学OBのデフリンピック棒高跳び銅メダリストで横浜市立ろう特別支援学校の竹花康太郎教諭との出会いがきっかけ。また、「スポーツに力を入れていて、なおかつ特別支援教育について学べるから」と教育学部に進み、現在は特別支援学校の先生を目指す。

初体験のデフリンピックは「初めての世界大会だったが、緊張というよりはわくわくし、楽しみという気持ちの方が大きかった」と振り返る。

ただ、残念だったのは、日本選手団がチーム内での新型コロナウイルス感染者の発生を受けて、大会途中で出場辞退したことだ。北谷は4×100メートルリレー、4×400メートルリレーにエントリーしていた。「先輩と6人でメダルを持って帰国するという大きな目標があったので、達成できなかったことは本当に悔しい」と語る。また、今大会を最後のデフリンピックにしていた選手もいて、出場できないまま大会を終えた選手たちの姿は、見るだけでも辛かったという。

全日本ろうあ連盟は2025年デフリンピックの日本招致を目指している。

日本開催が決まったら？そう問われると北谷は力を込めた。「耳が聞こえなくてもスポーツには関係ないということを改めて証明して、未来のデフ選手に夢を与えられるようなプレーを見せたい。ぜひ、生で見てもらいたい」

Topic

目指すはパリ五輪

アジア予選１位通過見据えた強化合宿

高校男子強豪チームとも対戦

日本各地にひろがる大体大ハンドボールの輪

体育学部の楠本繁生教授が監督を務めるハンドボール女子日本代表「おりひめジャパン」が５月、本学で合宿を実施した。

女子日本代表は、昨秋、本学ハンドボール部女子を史上最多のインカレ８連覇に導いた楠本教授が監督に就任。合宿のメンバー21名のうち12名が本学の卒業生。また、４年の岡田彩愛選手も参加した。

「楠本JAPAN」にとって３回目となる強化合宿の主な狙いは、高校男子の強豪チームと対戦し、スピード、パワー、高さへの対応力をつけること。３月の全国高校選抜大会のベスト３各校と、監督がすべて本学OBだった縁で対戦することになり、本学での合宿前には、徳島県で同大会優勝の香川中央と練習試合を行った。

本学では、同大会３位の大阪体育大学浪商高校との練習ゲームに臨んだ。試合後は、楠本監督から試合で出た課題を指摘され、一つ一つのプレーを確認していた。

楠本監督は「各高校の皆さんに快く強化に協力してもらい感謝しています。９月のアジア大会は延期になったが、このチームが登らなければならない最大の山は来年のパリ五輪予選。アジア１位で通過することを見据えた強化をしていきたい」と話していた。

白熱のプレー、日本でも見てもらいたい

バレーボール部男子

バレーボール部男子の寺井捺貴（体育３年）もデフリンピックの日本代表に選出された。日本選手団内での新型コロナウイルス感染のため途中棄権になったが、セッターとしてJAPANをけん引。「デフリンピックは、国を背負って戦う世界の人々のオーラがすごく、いい刺激になった」と振り返る。

バレーボール日本男子は予選リーグを２勝３敗、Bグループ４位で通過し決勝トーナメントに進出。準々決勝でイタリアに０－３で敗れて５－８位決定戦に進んだところで棄権となり、最終成績は８位。寺井は棄権を「状況を受け止められない選手が多く、本当にがっかりしていた」と語る。

寺井は、中学１年からバレーボールを始め、中学３年の時、全国障害者スポーツ大会で優勝。大阪・桜宮高校３年で主将としてジャパンデフバレーボールカップを制した。本学では、バレーボール部のほか、週２回ほど地元の聴覚障害者のクラブチーム「好きやねん」の練習に参加している。

デフリンピックでは、「応援してくれている方々を思いながら正々堂々と戦うことができた」という。「次回大会の日本開催が決まったら、さらに白熱したプレーを皆さんに見てもらいたい」と力を込めた。

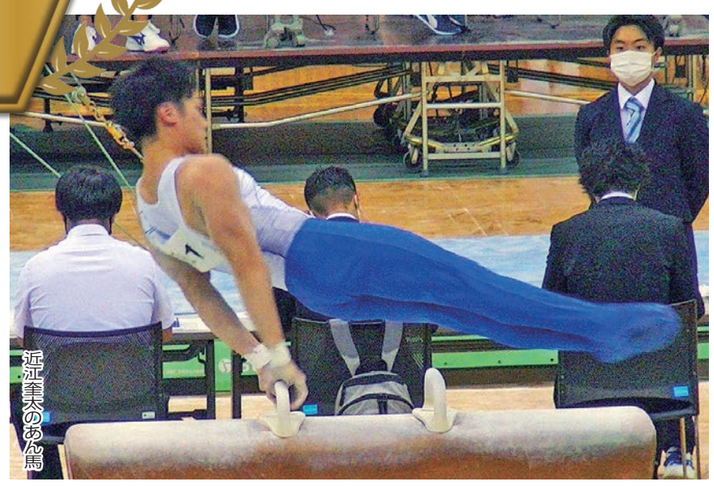
男女 団体総合優勝!!

男子15連覇　女子10年ぶり6回目

体操競技

体操競技部男女が4月29、30日に姫路ヴィクトリーナ・ウインク体育館で行われた第64回関西学生体操選手権大会で、ともに団体総合優勝を果たした。男子は15連覇を達成、女子は10年ぶり6回目の優勝だ。

また、5月27～29日に愛知県豊田市で行われた第72回西日本学生体操競技選手権大会では、男子は団体総合で準優勝。女子は3位に入った。


近江奎太のあん馬

男子

男子は4月の全日本個人総合選手権・種目別トライアウトで好スタートを切った。個人での日本一を狙うこの大会に、本学からは体育学部の藤島央基（4年）、近江奎太（3年）、田部壮一郎（2年）、築山翔馬（1年）、唐澤一志（1年）、北本千真（1年）の6名が出場し、築山が種目別ゆかで4位、唐澤が跳馬で11位、田部がつり輪で20位に入り、6月の種目別選手権にコマを進めた。

このように全日本レベルで勝負している選手を筆頭に、関西学生選手権では圧倒的な力を発揮。団体総合に加え、団体種目別選手権の部でも全6種目を制覇した。個人総合は築山が優勝、田部が2位となり、4～8位も本学勢が占めた。種目別では築山がゆかと跳馬、藤井滉翼（体育3年）があん馬、藤島がつり輪、田部が鉄棒で優勝した。

西日本学生選手権での団体表彰台は久しぶりで、1994年以来28年ぶりとみられる。また、西日本では今年度インカレ優勝を狙う鹿屋体育大学の力が抜けているが、本学が西日本の雄、福岡大学を上回ったのは、全日本を含めて久しぶりという。

田部壮一郎のつり輪

築山翔馬のゆか

関西学生体操選手権大会
西日本学生体操競技選手権大会

個人総合では築山が5位、種目別では、ゆかで築山が優勝、あん馬で近江が準優勝、つり輪で田部が3位、跳馬で林和輝（体育3年）が3位に入る大健闘を見せた。

築山は得意のゆかで、本学勢として7年ぶりにNHK杯にも出場。細身の体形を生かしたひねりが巧みでゆかでの勝負強さが際立つ。小学5、6年で全国U―12個人総合優勝、高校でもゆかで全日本ジュニア優勝を果たし、U―18に選出されるなど、実績は豊富だ。1年生では同じくU―18強化メンバーの北本、全日本ジュニア跳馬優勝の唐澤も地力があり、3年生の近江、2年生の田部も強豪の清風高校から本学に進み、チームをけん引している。藤原敏行監督は「近年の強化や土台作りの成果で、優秀な選手が本学に進む流れができてきた」と語る。また、2019年から学園のトップスポーツクラブを通じて体操競技の強化に尽力している元五輪メダリストの佐藤寿治コーチの存在も非常に大きいという。

8月には全日本インカレが控える。藤原監督は「過去最高成績は6位。歴史を超えて5位以上に入りたい」と目標を定めている。

女子

女子の田原宏晃監督は10年ぶりの関西学生優勝にも「けが人が多い中、出場したメンバーはよく頑張ったが、2種目めの平均台で連続したミスがあり、今後に不安を残す内容だった」と厳しく振り返る。

個人総合で北田絢女（体育2年）が優勝し、吉田菜々花（体育3年）が3位。種目別でも北田が跳馬、吉田がゆかを制した。全日本3大会連続出場の北田はつま先まで伸びたきれいな演技を武器に試合に強く、吉田は豊富な練習量に裏打ちされた演技が持ち味だ。北田は4月の全日本個人総合選手権でも個人総合予選で43位、吉田は72位に入り、ともにチームを引っ張った。

5月の西日本学生選手権は団体総合3位。関西学生3位の吉田が手首を痛めて欠場し、メンバーを入れ替えて挑んだ。それでも、個人総合で北田が2位、横江恵（体育1年）が7位、大野帆加（体育2年）が9位と健闘した。4年生も松本友香（体育）が跳馬で4位、主将の魚井光（体育）が平均台で7位と持ち味を出した。

8月のインカレに向けて、田原監督は「けがをしている選手はインカレに照準を合わせて復帰を目指し、練習を積んでいる。全員にインカレ出場のチャンスがあり、チーム一丸となって挑みたい」。2014年以来となる5位以内を目標に掲げている。

インカレ5位入賞

硬式野球部 女子

硬式野球部女子が5月に高知県安芸市で開催された第8回全日本大学女子硬式野球選手権高知大会に出場。初戦で敗れたが順位決定戦で勝利し、5位に入賞した。

初戦で日本大学国際関係学部と対戦。初回に先制点を奪われ二回にも追加点を許す苦しい展開となった。打線がつながらず、最終回に1点を返したが、1―5で敗戦。順位決定戦に回った。

順位決定戦では、環太平洋大学と対戦。投手戦となり両チーム無得点が続いたが、最終回で2点を先制。そのまま逃げ切って2―0で勝ち、同率5位で大会を終えた。

チームは昨年、秋に和歌山県で開催された第11回全国大学女子硬式野球選手権大会で2009年の創部以来13年目で初めてインカレ初優勝を成し遂げた。

秋に続く連覇を狙っていただけに、主将の弓埜里桜（体育4年）は「日本一を目指して練習してきたので負けたことが悔しい。夏は絶対に同じ負け方をしない」と話す。

昨年までに、卒業生を含む4選手が新設の阪神タイガースWomenに入団。さらに巨人が新たに創設する硬式女子野球チームにも4年生1名が加入が決まるなど、硬式野球部女子の注目度は高まっている。

「1からチームを創り直したい」と弓埜。秋の全国大学女子選手権で雪辱を期す。

大熊ところ

全日本大学女子硬式野球選手権高知大会

弓埜里桜

円陣を組む選手達

個の奮闘も、求められる新戦力

硬式野球部 男子

森下瞭

阪神大学野球春季リーグ

硬式野球部男子は4～5月に行われた阪神大学野球春季リーグで、4勝6敗で4位。2019年春以来の優勝は果たせなかった。

春季リーグに向けての課題は打力の強化。秋季リーグでは、防御率2・86と投手は健闘したが、打線が援護できない試合が続いた。1試合4点、5点を取る打線を目指し、リーグに臨んだ。

結果的に春季リーグのチーム打率は昨秋の2割2分6厘から、春は2割4分7厘にアップ。ファーストストライクから積極的に打つ意識は浸透し、リーグとオープン戦を含めた本塁打数も昨秋の2本から、春は11本に急増した。

しかし、春の防御率は4・29でリーグ最下位。投手陣が踏ん張れなかったのが誤算となった。

痛かったのは、2勝2敗で迎えた4月23日の対神戸国際大学初戦。それまで2戦目に先発し結果を出していた杉本壮志（体育4年）を1戦目に回したが、1―2で惜敗。優勝争いから後退した。

個人タイトルでは、ベストナインを二塁の中川健太郎（体育4年、2回目）、指名打者の森下瞭（体育4年、初）が受賞。リーグのオールスターに杉本、捕手の阿吹俊介（体育4年）、中川、左翼で主将の大槻龍城（体育4年）が選ばれた（杉本は故障のため辞退し、森下が代わって出場）。

また、9番の野上聖喜（体育3年）が終盤まで首位打者争いに絡み、8番の中川が打率4割超をマークするなど下位がよく打ったのも特徴だ。

秋季リーグに向けて、中野和彦監督は「杉本に続く投手の整備が急務。4年生が主体のチームだが、来春を見越して下級生も起用していくことになる」と話している。

野上聖喜

位田遼介

弓埜祥大郎

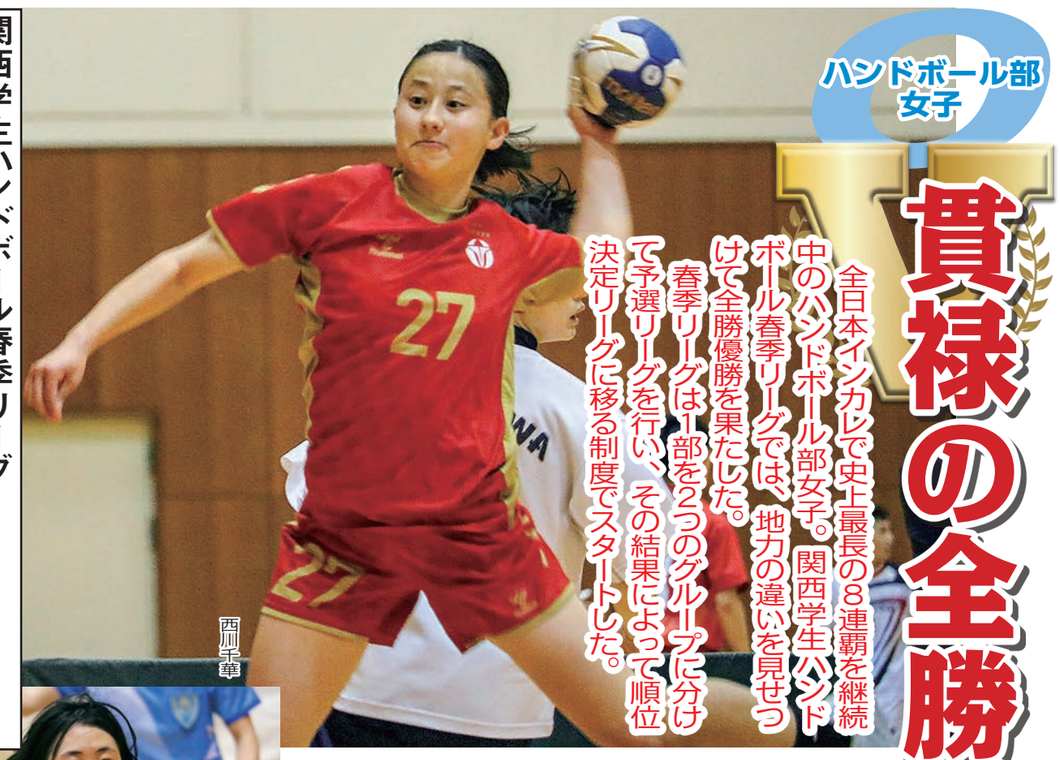
阿吹俊介

ハンドボール部 女子

貫禄の全勝優勝

全日本インカレで史上最長の8連覇を継続中のハンドボール部女子。関西学生ハンドボール春季リーグでは、地力の違いを見せつけて全勝優勝を果たした。春季リーグは1部を2つのグループに分けて予選リーグを行い、その結果によって順位決定リーグに移る制度でスタートした。

関西学生ハンドボール春季リーグ
関西学生女子ハンドボールトーナメント選手権大会

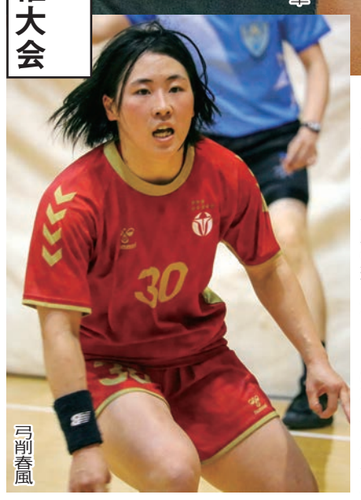

西川千華

チームは、今季、長年使ってきたユニホームを新たに変えて臨んだ。新チーム初戦となったリーグは、最終戦で武庫川女子大学を38―20で降して全勝で終えた。

続く6月の関西学生女子ハンドボールトーナメント選手権大会は、同一大学から複数のチームの出場が認められる。本学は3年生以下の選手でメンバーを組み、大阪体育大学A、Bの2チームで出場。両チームは危なげなく勝ち進み、30―28でAチームが優勝し、選手層の厚さをみせた。中心選手の西川千華（体育3年）は「4年生に頼っているばかりではなく、普段の練習から下級生が主体的に取り組んでいく必要がある。また、大会を通じてチームの底上げの必要性を感じる」と話した。

また、主将で、女子日本代表「おりひめJAPAN」の合宿にも候補選手として参加した岡田彩愛（体育4年）は「リーグ戦でもチームの課題はたくさん見つかった。練習の質を高めて、個人技術はもちろん選手同士で刺激し合いながらチーム力を高めていきたい」

歴代の卒業生たちがつないできた全日本インカレ連覇のたすき。今年、どう継続していくか。また、日本選手権の優勝も悲願だ。


弓削春風

岡田彩愛

石川空

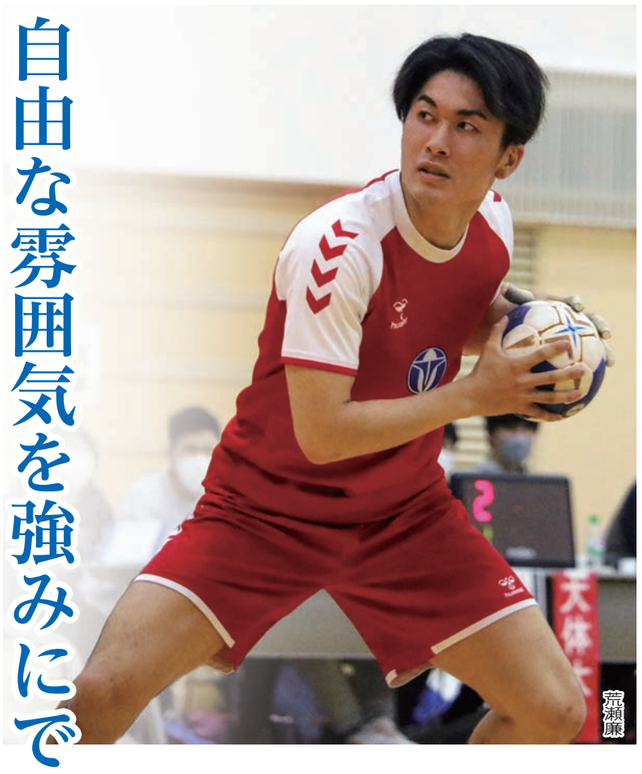
ハンドボール部 男子

圧巻の全勝優勝

関西学生ハンドボール春季リーグ
関西学生ハンドボールトーナメント選手権大会

全国の頂点を狙うハンドボール部男子。大阪体育大学などを会場に行われた関西学生春季リーグを全勝優勝、関西学生トーナメント選手権大会も優勝を果たした。

自由な雰囲気を強みにできるチーム


荒瀬廉

チームは昨年、全日本学生選手権大会で決勝の舞台を経験した選手が多く残る。

春季リーグは危なげなく優勝した。同一大学から複数のチームの出場が認められる関西学生トーナメント選手権大会では、優勝から3位までを独占した。

50名を超える大所帯のチームを率いる下川真良監督は、8月に山口県周南市で開催される西日本学生選手権大会に向けて選手の選考を進めている。「春季リーグやトーナメント選手権大会では平等に経験を積ませるべく、多くの選手を起用した。1年生ながら試合のメンバーに食い込んでくる選手の存在や、意外な選手の活躍でチーム内の競争を促すことができた。西日本インカレの目標は優勝をすることと」と話す。

昨年に引き続き主将を務める藤田響（体育4年）は「一人ひとりの個性が強く、自由な雰囲気を強みにできるチーム。西日本インカレは1年生だった3年前に出場し、決勝で敗れて準優勝。そこから新型コロナウイルスの感染拡大で大会が中止となったので、最終学年である今年はなにがなんでも優勝したい。夏に勢いをつけることができれば、秋のリーグ戦と全日本インカレに弾みをつけられるはず」。これから本格化するシーズンに向けて力強く語った。

藤田響

木大隆雅

矢羽斗

バレーボール部 女子

昇格、秋こそは

関西大学バレーボール春季リーグ
西日本バレーボール大学女子選手権大会

バレーボール部女子は4～5月の関西大学バレーボール春季リーグで女子2部2位。入れ替え戦で敗れて、1部昇格は果たせなかった。しかし、6月の第48回西日本バレーボール大学女子選手権大会で手応えをつかみ、秋季リーグで悲願の達成を目指す。

得点に喜ぶチーム

春季リーグは8勝2敗。1位の大阪国際大学にセット率で下回ったが、大阪国際大学には2勝した。長江晃生監督は「上に上がる地力はある。あとは戦術をよりレベルアップしたい」と話す。

リーグ戦では、権藤真実（体育3年）が175㌢の長身からチーム最多のアタック決定率を残し、ブロック力も高い。黒田菜々（体育3年）は守備力とパワーに優れ、攻守にチームを引っ張って敢闘賞を受賞した。船田璃々香（体育2年）もパワーがあり、得点を重ねた。大型セッターの坂本千愛（体育3年）はブロック力と高い位置からのトス回しに優れ、セッター賞を受賞した。リベロの山口綾乃（体育1年）は高校時代から経験豊富で指示する力に優れ、リベロ賞を獲得した。

関西福祉大学との入れ替え戦は、相手が想定外のメンバーを組んできたことに対応が遅れ、第1、第2セットを落とした。フルセットに持ち込んだものの及ばず、2019年秋以来の1部復帰は果たせなかった。

しかし、西日本大学女子選手権では、予選グループ戦で東海地区2位と地力のある至学館大学との試合で、入れ替え戦の反省を生かして初対戦のチームに素早く対応し、2―1で勝利。決勝トーナメントは3回戦で敗れたが、関西1部の千里金蘭大学戦は、最近では一番良かったという内容で快勝。また、リーグ戦では控えが多かった主将の増田結子（体育2年）、新戦力の吉村知夏（体育2年）が起用されて、期待に応えたのも収穫となった。

また、チームは今季から有方からだ鍼灸院（姫路市）、岸田スポーツ（岸和田市）とスポンサー契約を結び、支援を受ける。

権藤真実

坂本千愛

黒田菜々

バレーボール部 男子

辛くも降格免れる

西日本バレーボール大学男子選手権大会

バレーボール部男子は4月に開幕した関西大学バレーボール春季リーグで3勝8敗の11位。入れ替え戦で勝ち、2部降格は辛くも免れた。

今年のチームは、昨年の主力である両エース、セッター、リベロと、チームの屋台骨となるポジションでレギュラーだった選手たちが卒業し、新チームはガラリとメンバーが変わった。

前田賢治（左）

小川永遠

江口喬太郎

浅井正仁監督は「新チームが始まってから、レセプション（サーブレシーブ）の返球率が下がり、ブロックとレシーブの連携もまだまだ。経験が不足している」と話し、リーグ戦に向けて不安は残っていた。

懸念通り、リーグ戦は苦しい戦いが続いた。しかし、最下位の12位と11位を分けることになった大阪商業大学戦では、7連続得点を挙げるなど攻撃がつながり、3―1で勝利。2部に自動降格となる最下位を免れた。

入れ替え戦では4年生の一部が教育実習のためチームから離れた。浅井監督は「4年生が抜けることが分かっていた分、チームがまとまっていた」と話す。プレッシャーのかかる中で神戸学院大学を相手に3―0でストレート勝ちし、1部残留を決めた。

6～7月に広島県で行われた第48回西日本大学男子選手権大会では、予選グループ戦で桃山学院大学を2―0のストレートで降し、決勝トーナメント初戦はびわこ成蹊スポーツ大学に2―0で勝った。2回戦では中京大学に0―2で敗れた。

江口喬太郎主将（体育4年）は「一戦一戦、成長している。負け試合でも内容はよくなり、春のリーグや西日本の経験が生きている」。インカレ出場がかかる秋季リーグに、苦しんだ春以降の経験をどう生かすか。巻き返しが期待される。

榮温輝

連覇！17回目の優勝！

「シーズン最初の試合でつまずくわけにはいかなかった」

バスケットボール女子

全関西女子学生バスケットボール選手権大会

バスケットボール部女子は4～5月、東和薬品RACTABドームなどで行われた第43回全関西女子学生バスケットボール選手権大会で2年連続17回目の優勝を達成した。

チーム全体で7つの個人賞

予選から決勝リーグ最終戦まで危なげなく勝ち進み、同じく全勝の大阪人間科学大学と2年連続同カードの優勝決定戦で対戦した。

エースの大吉まな（体育4年）が「大阪体育大学バスケットボール部女子は日本一をめざすチーム。大会までに練習試合をたくさん組むことができず自分たちの実力がはっきりとわからない不安もあったが、シーズン最初の大会でつまずくわけにはいかなかった」と話すように、チーム全体でなにがなんでも勝つという意識が共有された大会だった。

緊張感の漂うなか優勝決勝戦が始まる。試合は、アンモールプリート・コール（体育4年）のフィジカルの強さが際立ち、インサイドの争いを制圧。大吉が攻守ともにチームを統制し、味方を活かしつつ自らも長短織り交ぜた多彩なシュートで得点を重ねた。

日高ひかる（体育2年）など若手の躍動もあり、試合が進むにつれて点差が開き62―47で勝利。連覇を達成した。

村上なおみ監督は「苦しい時間帯が続いていたが、勝負所で4年生が奮起してくれた」と選手を労った。

表彰式では個人賞として、村上なおみ監督が優勝監督賞を受賞。大吉が最優秀選手、得点王、3ポイント王、アシスト王を獲得。アンモールプリート・コールが優秀選手賞とリバウンド王に輝き、チーム全体で7つの個人賞を受賞した。

◇　◇　◇

6月に丸善インテックアリーナ大阪などで行われた女子第71回西日本学生バスケットボール選手権大会では、準々決勝で名古屋学院大学に69―71で惜敗し、ベスト8だった。

日高ひかる

大吉まな

アンモールプリート・コール　大吉まな

バスケットボール男子

関西学生バスケットボール選手権大会
西日本学生バスケットボール選手権大会

攻撃面に課題

バスケットボール部男子は4～5月の第49回関西学生選手権大会で1、2回戦を突破したが、3回戦で関西学院大学に敗れた。6月の第72回西日本学生選手権大会でも4回戦で同じ関西学院大学に敗戦。攻撃面に課題を残した。

新チームの課題は、卒業した主力のアデバンジョ・ウィリアム、中原啓太の穴を、仲田泰利（体育3年）、下田平翔（体育3年）、市原修也（体育3年）らがどう埋めるかだった。関西学生選手権は関西外国語大学、追手門学院大学に快勝したが、関西学院大学には60―69。ディフェンスは失点を60点台に抑え健闘したが、攻撃に決め手を欠いた。

西日本学生選手権も摂南大学、広島工業大学に大差をつけたが、4回戦の関西学院大学戦で55―58。試合終了間際に追いつかれ、逆転された。

チームには、エースガードの請田祐哉（体育4年）は関西のガードでは5本の指に入る実力があり、3ポイントシュートの成功率が高いSG・里見龍平（体育4年）、190㎝の長身でリバウンド獲得率の高いF・仲田、1年生ながらシュートセンスの良いSG・山田大智（体育）らの力のある選手が多い。

チームの目標は秋の関西学生リーグで初優勝してインカレに進むことだ。比嘉靖監督は「シュートのフィニッシュ力、決め切る力を鍛えたい」。攻めを磨いて悲願を目指す。

仲田泰利　下田平翔

里見龍平

請田祐哉

ソフトボール部

全日本大学ソフトボール選手権大会近畿予選会

ソフトボール部男女が5月の全日本大学選手権大会近畿予選会で勝ち、男子は4年ぶり、女子は29年ぶりの全日本インカレ（9月）出場を決めた。

泉南市民球場

行くぞインカレ！

男子4年ぶり　女子29年ぶり

男子　男子（春季リーグ2部Aブロック3位）は初戦で大阪公立大学（2部Bブロック3位）と対戦し、20―2で4回コールド勝ち。2戦目の四天王寺大学（1部リーグ6位）戦は、好調の打線が決勝でもつながり14―4の4回コールド勝ちで2連勝し、インカレ出場が決定。

南山弘大主将（体育3年）は「チーム23人全員でつかみ取ったインカレ出場。試合するたびにチームが成長するのを感じた」と話した。

女子　女子（春季リーグ2部6位）は初戦で吉岡美鈴（体育4年）が大阪大谷大学（1部7位）に三塁を踏ませず、2―0で完封勝利。2戦目の羽衣国際大学（2部5位）戦は、四回に梅本くるみ（体育4年）が先制打を放ち、七回に秋富若葉（体育3年）が本塁打。吉岡が2試合連続の完封を果たし、3―0で快勝。井上恵主将（体育4年）は「目標としてきたインカレの切符をチーム全員でつかみ取ることができた」と話した。

剣道

宮本、本学5年ぶり個人V

第70回関西学生剣道選手権大会

剣道部男子は5月1日、おおきにアリーナ舞洲で行われた個人戦の第70回関西学生剣道選手権大会で、宮本翔太（体育4年）が本学勢としては5年ぶりの優勝を果たした。熊亮祐（体育4年）は3位、長谷川頌亮（体育3年）は8強に進出した。

この3人と、川頭泰輔（体育4年）、藤木秀行（体育4年）、下村亮（体育3年）の合わせて6人が全日本学生選手権への出場を決めた。

宮本翔太

男子　宮本は攻めの強さ、相手の攻めを崩して伸びのあるメン技を打ち切れるところが強みだ。準決勝では、延長戦の末に小手を決めて関西大学の選手に勝ち、決勝は近畿大学の選手にメンを決め、小手を取り返された後、メンを決めた。宮本は優勝できる実力を備えながらも昨年は2回戦で敗れており、「今まで結果が出なかったが、今日の優勝で少しは報われたと思う。決勝は気持ちで押し切ることができた」と語った。

熊は、相手をしっかり見て技を引き出して打つタイプ。3回戦で地力のある、上段の構えの近畿大学の選手に勝って勢いをつけ、準々決勝で同じ上段の構えの選手を圧倒。準決勝では敗れたが、あと一歩で大会初の大体大同士の決勝が実現するところだった。

それでも、村上雷多監督は「宮本は本来の実力を発揮すれば優勝できる選手。6人が全日本に進んだが、他の選手ももっと上位に食い込まないといけない」と厳しい。5月28～29日の西日本学生大会（団体戦）では、1回戦、2回戦には勝ったが、3回戦で関西大学に代表戦の末、敗れた。

7月3日の全日本学生選手権では、川頭が3勝して32強に進み、長谷川が1勝した。また、東西対抗試合では、熊が優秀選手に選ばれた。

村上監督は「部員は本当に一生懸命稽古しているが、『一生懸命』で満足していたところがあったのではないか。厳しさ、勝ち切る気持ちの強さを鍛える必要がある」と高みを目指している。

川頭泰輔

熊亮祐

長谷川頌亮

6名が全日本選手権へ

第52回関西女子学生剣道選手権大会

剣道部女子は5月1日、おおきにアリーナ舞洲で行われた個人戦の第52回関西女子学生剣道選手権大会で、堀由美恵（体育3年）が4勝して16強に進出。全日本女子学生剣道選手権大会の出場権を獲得するとともに、全日本学生剣道東西対抗試合のメンバーに選出された。

堀由美恵

東西対抗選出も

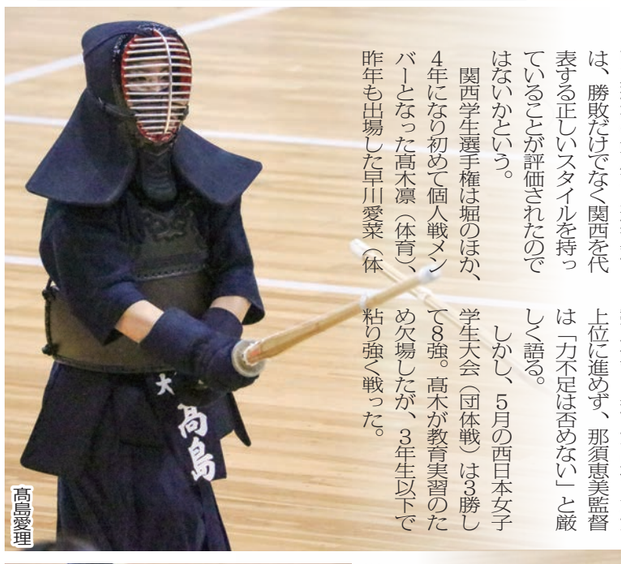
女子　東西対抗への出場は関西から4名だけ。堀は地力があり、小技を用いない正統派の剣風だ。選考会では、勝敗だけでなく関西を代表する正しいスタイルを持っていることが評価されたのではないかという。

関西学生選手権は堀のほか、4年になり初めて個人戦メンバーとなった髙木凛（体育）、昨年も出場した早川愛菜（体育3年）、地力のある髙島愛理（体育2年）、1年秋も団体戦メンバーを務めた湯川愛梨（体育2年）が出場したが、上位に進めず、那須恵美監督は「力不足は否めない」と厳しく語る。

しかし、5月の西日本女子学生大会（団体戦）は3勝して8強。髙木が教育実習のため欠場したが、3年生以下で粘り強く戦った。

また、7月2日の全日本女子学生選手権では、堀は3勝し、16強に進んだ。また、東西対抗試合では優秀選手に選出された。

9月には団体戦の関西女子学生剣道優勝大会、11月には全日本が控える。那須監督は「若いチームでまだ本当の実力を見極めきれていない。西日本大会のメンバーを軸に、1年の中からも誰かが台頭してほしい」と期待している。


高島愛理

高木凛

早川愛菜

柔道

厳しいスタート

課題確認、巻き返し図る

第72回関西学生柔道優勝大会

男子　柔道部男子にとっては厳しいスタートとなった。5月29日、尼崎市のベイコム総合体育館で行われた第72回関西学生柔道優勝大会。1部Bトーナメントの初戦で京都産業大学に0―4で敗れた。

生田秀和監督は「地力がまだまだ。確実にポイントが取れる選手が育っていない」と話す。

試合（7人制）は先行逃げ切りを目指し、先鋒に主力の水田桜介（体育3年）を起用。経験が豊富で担ぎ技ができる選手だが、相手も地力のある選手を先鋒に起用し、引き分けた。次鋒は昨年、インカレにも進んだ廣田智大（体育2年）だったが、軽量級の66キロ。2階級ほど体格で勝る相手選手に敗れた。

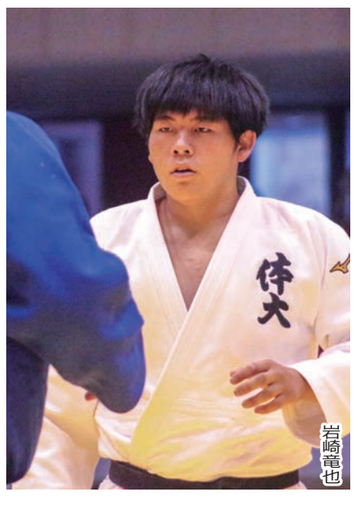
0―2で迎えた4人目の中堅戦。生田監督は「ここはお前に勝負を預ける場面だ」とポイントゲッターの久々宮滉大（体育3年）を送り出したが、引き分けに終わり、流れを変えることができなかった。

生田監督は、課題として組み手を挙げる。「いくらいい投げ技を持っていても、組み手ができないと投げられない。普段の練習から厳しく鍛えていきたい」。8月の関西学生体重別選手権大会（個人戦）、10月のインカレに向けて巻き返しを図る。

水田桜介

廣田智大

久々宮滉大


岩崎竜也

気持ちで掴んだ全日本への切符

関西学生女子柔道優勝大会
全日本学生女子柔道優勝大会

女子　柔道部女子は5月の第30回関西学生女子優勝大会で武庫川女子大学を降して3位に入り、6月の第31回全日本学生女子優勝大会に進出した。

5人制の優勝大会は序盤から劣勢となった。先鋒・千代村沙都貴（体育2年）、次鋒・西尾碧（体育3年）が力のある相手にともに敗れた。後がない状況を救ったのが、1年の中堅・中本真奈美（体育）だ。相手をまったく寄せ付けず抑え込みで一本勝ちし、流れを変えた。副将・森口志保（体育2年）が引き分けて1―2。

大将・辻野いづみ（体育2年）は身体能力が高く、センスがある選手だ。相手は試合巧者で技あり1つでは敗退する状況の中、あっさりと技あり2つを取って代表戦に持ち込んだ。

代表戦は副将戦で優勢だった森口。プレッシャーがかかる中、本戦以上に積極的に攻めて勝ち切った。準決勝では前年優勝の明治国際医療大学に敗れたが、全日本の切符をつかんだ。

全日本大会では初戦の2回戦で富士大学に2―0で勝利。3回戦では優勝した東海大学に0―4で敗れた。

関西学生優勝大会について、松田基子監督は「全日本の出場権がかかり、1年で一番プレッシャーがかかる負けられない大会。選手も気持ちが入っていた」と振り返る。

8月には関西学生女子体重別選手権大会がある。この大会の結果は全日本学生女子体重別団体優勝大会の出場権にもつながる。松田監督は「8月の関西学生は総力戦。延長に入ってスタミナ負けしない追い込んだ練習を通じて試合でのしつこさ、執着心を磨き、全日本体重別団体の出場権を勝ち取りたい」と話している。

中本真奈美

千代村沙都貴

森口志保

辻野いづみ

サッカー

サッカー部女子は関西学生女子サッカー春季リーグを5勝1敗1分けでフィニッシュし、優勝を果たした。5月29日、姫路獨協大学グラウンドで行われた春季リーグ戦第5節は明治国際医療大学と首位を争う大一番となった。

課題、解決、準備そして勢い

リーグ制し、目標は常にインカレ優勝

関西学生女子サッカー春季リーグ

宮本春花

5月にも関わらず30度を超える気温のなかで白熱する試合は、大阪体育大学が後半に2得点をあげ2−0で勝利。優勝争いで一歩リードし、勢いをそのままに残りの試合でも勝ち点を獲得し、優勝した。主将の樋口佳那子（体育4年）は「新チームになってから、練習試合をたくさん組むことができて課題が見つかった。その課題に4年生から率先して解決に動くことができたことで、チームが団結した。リーグ戦は教育実習で抜けるメンバーがいることもわかっていたので、そこもしっかりと準備できた」と話した。

大阪体育大学サッカー部女子のチームの目標は常に全日本大学女子サッカー選手権大会（インカレ）での優勝だ。そのために目の前の春や秋のリーグ戦に全力で取り組むことが重要になることをチームで確認している。

石居宜子監督は「教育実習で4回生が抜ける春季リーグでは、降格や入れ替え戦に回ることもあるのではないかと心配していた」と振り返る。しかし、今年の新入生は活気があって下からチームを刺激し、4年生の強い意志もあり、良い結果を残せたという。「今の4年生は1年生のときにベスト4で敗退した。チームの目標を果たすためにまずは決勝ラウンドに残ることが必須。関西のリーグ戦の中でそのための底力をつけていきたい」と秋以降を見据えた。

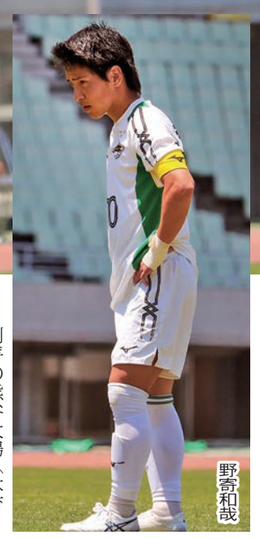
暫定2位で折り返し

目指すは日本一、「王座奪還」

関西学生サッカーリーグ

サッカー部男子は第100回関西学生サッカーリーグ（前期）の10試合終了時点で暫定2位の位置につける。チームの目標は日本一とリーグ戦の王座奪還だ。

古山兼悟


野寄和哉

河村匠

副将の熊谷太陽（体育4年）は「今年は飛びぬけた存在のスター選手はいないといわれているが、大阪体育大学サッカー部は日本一をめざす集団だ」と話す。今年のチームは王座奪還をテーマに掲げ、リーグ戦を制して関西王者の座を奪還することはもちろん、インカレで関東の大学を倒して日本一になることを目標にしている。その実現のため、細かいミスをなくそうと、副将としてプレーだけでなく私生活から様々なことに気を配るように行動で示しているのだという。

リーグ戦は、開幕から連敗を喫する厳しいスタートとなったが、チームはモチベーションを落とすことなく試合を経るごとに修正を重ねてきた。

6月に入るとチームの調子は上向く。その象徴が、昨季の関西王者で今期も好調を維持する関西学院大学との一戦。前半開始早々2点を先行されたが、PKを野寄和哉（体育4年）が冷静に蹴り込み1点を返すと、古山兼悟（体育2年）が相手と並走しながら正確にコースを突くシュートでゴール。全員で攻めて全員で守るサッカーで、2点を追いつき引き分けに持ち込んだ。6月は負けなしで暫定2位と優勝を狙える位置につけている。

熊谷太陽

福島充ヘッドコーチは「若いチームで経験値は高くなかったが、試合ごとに課題を見つけて乗り越えて行ける素直さとポテンシャルがあり、伸びしろがある。大きな大会で結果を残すには、一つひとつの大会に全力を尽くしてタイトルを積み重ねていくことが重要」。より強く、周囲に応援されるチーム作りをめざす。

ラグビー

関西大学ラグビー春季トーナメント

ラグビー部は5月から開幕した関西大学春季トーナメントに出場し、1回戦で関西大学に7−38で敗れたが、順位決定戦で龍谷大学に27−21で勝利し、12チーム中11位で大会を終えた。

主将の岩本晃伸（体育4年）は「好不調の波を作ってしまう試合が多かったが、龍谷大学戦は試合を通して自分たちでコントロールできた」と力強く話す。春季トーナメントで試合を重ねるうちに、チーム内で意識の統一が徐々に図れてきていることを強調した。

中井俊行監督は「大阪体育大学の伝統であり特徴でもあるのは強いフォワード。ここを強化して3年越しのAリーグ復帰に向けて更なる強化に挑む」と決意をのぞかせた。

◇　◇　◇

また、トンガ沖の海底火山噴火と津波による被災地域の救援と復興支援を目的とするチャリティーマッチが、6月に秩父宮ラグビー場で開催され、トンガチームのメンバーに、シオネ・マウ（体育2年）が大学生として唯一選出され、後半9分からプレーした。

バドミントン

関西学生バドミントン春季リーグ

バドミントン部男子は4月から始まった関西学生バドミントン春季リーグ2部で優勝、5月の入れ替え戦で1部の同志社大学に勝利し、1部昇格を成し遂げた。女子も2部リーグで3位の好成績を残した。

リーグ戦は、シングルス3試合、ダブルス2試合の計5試合の団体戦で実施される。8チームを2つに分けた1次リーグ（4チームの総当たり戦）の後、上・下位2チーム同士で再編した上位・下位リーグにて順位を決定する。

男子チームは2部1次リーグで大阪教育大学、大阪産業大学、神戸学院大学戦の3試合をすべて5−0と完封。1次リーグを1位で通過し、上位リーグに挑んだ。

上位リーグでは神戸学院大学に勝利したが、関西大学に2−3で敗れた。最終戦は、それまで全勝の近畿大学が相手だったが4−1で勝利。大阪体育大学、関西大学、近畿大学が勝率で並ぶ混戦となったがマッチ数・得点率差で本学が優勝。名田慎二郎（体育3年）がバドミントンマガジン賞（最優秀選手賞）を受賞した。

女子も2位通過で上位リーグに進んだ。入れ替え戦には届かなかったが、3位に入る健闘をみせた。

男子チームは、5月28日に1部リーグの同志社大学との入れ替え戦に臨んだ。

試合は拮抗したシーソーゲームで最終第5シングルスまでもつれ込んだが、名田が勝利。4時間半の激闘を制して3−2で勝ち、1部リーグ昇格を決めた。

なぎなた

演技の稽古をする阿部と河野

関西学生なぎなた選手権大会

なぎなた部は6月の関西学生選手権大会で、試合形式で行われる個人の部で阿部真優（体育3年）が優勝。演技の部は河野葵（体育2年）とペアを組み、安定した演技を披露して準優勝だった。

少数精鋭で挑む剣道部から助っ人も

今年のなぎなた部は少数精鋭だ。昨年の全日本学生なぎなた選手権大会（全日本インカレ）の演技の部で4連覇、個人の部も優勝を達成した4年生が卒業。部員は大学からなぎなたを始めた選手を含む3名となった。

主将の阿部は「新チームになってから、それぞれのレベルがバラバラな状況となったが、部員同士が刺激し合って、技術の向上につなげられる状況で稽古が積めている」と前向きに話した。

天川彰子監督は「関西インカレが終了し、8月に長野県松本市で開催される全日本インカレに向けて稽古を積んでいる。演技の部で5連覇、個人の部も連覇をつなぎたい。5人で争われる団体戦は剣道部から3名の助っ人に出場してもらう。剣道部から学べることは多い」。部員は少ないながらも連覇への意欲を語った。

レスリング

西日本学生レスリング春季リーグ
西日本学生レスリング新人戦

レスリング部は5月の西日本学生レスリング春季リーグの1部に37年ぶりに出場した。

昨年11月の秋季リーグ2部で6戦全勝を果たして37年ぶりの1部昇格。全部員にとって初めての1部リーグだった。1回戦は周南公立大学に1−6。2回戦は立命館大学に3−4と連敗。雰囲気にのまれ、浮足立っているところもあったという。

しかし、試合を重ねるうちに成長し、3回戦は中京学院大学に4−3で勝利。5−6位決定戦で九州共立大学を4−3で降し、1部復帰戦は5位とし、残留を決めた。

姫路文博監督は「今年のチーム目標の1部リーグ3位以内は秋に持ち越しとなったが、今年度に目標達成できるよう頑張りたい」と話す。

また、6月の西日本学生新人戦では、男子グレコローマン63キロ級で前年優勝の濱口奏琉（体育2年）が2位。男子フリースタイル61キロ級で村山尚吾（体育2年）も2位に入った。

大会新！三冠！メダルラッシュ!!

水上競技

第10回関西学生チャンピオンシップ水泳競技大会

水上競技部は6月4～5日に丸善インテック大阪プールで行われた第10回関西学生チャンピオンシップ水泳競技大会で、女子が5種目で優勝するなど男女合わせて計19種目で表彰台に立った。

女子は12種目で表彰台。4×100㍍フリーリレーで、2位の近畿大学に0秒25差をつけて3分52秒40で優勝。4×50㍍フリーリレーでも大会新記録の1分46秒81をマークして優勝した。

男子4×100㍍フリーリレー2位。左から武田力紀、村田勇輝、泉大雅、北村祥瑛

女子4×100㍍フリーリレー1位。左から青山美咲、山村莉子、新山くるみ、河岸凛子

女子400㍍個人メドレー1位・枡井萌（右）、2位・山村莉子

女子100㍍平泳ぎ2位・戒能朝陽

男子100㍍平泳ぎ3位・森圭佑

個人では、河岸凛子（体育4年）が50㍍自由形を26秒36で制し、リレー2種目と合わせて3冠。新山くるみ（体育4年）も100㍍自由形を58秒36で制し、リレー2種目と合わせて3冠を達成し、「前半にいつもより早く入れたのがよかった。全体的にチームのみんなもいいタイムを出せている」と振り返った。また、400㍍個人メドレーで枡井萌（体育2年）が4分58秒35で1位に。「昨年は後半にばてるのが怖くて前半が抑え気味だったが、今年は前半から行けている」と振り返った。

男子は7種目で表彰台。4×100㍍フリーリレーで近畿大学と競り合い、3分23秒53の大会新記録で2位。第一泳者としてトップのタイムを出した武田力紀（体育4年）は「自己ベストが出た。自分がいい泳ぎをすればみんなも乗ってくると思った」と笑顔。武田は50㍍自由形、100㍍自由形でも2位と健闘した。

女子4×50㍍フリーリレー1位。左から河岸凛子、新山くるみ、水谷楓、新井はる佳

【男子】
▽50㍍自由形　②武田力紀（4年）23秒08
▽100㍍自由形　②武田50秒86
▽1500㍍自由形　③松村幸哉（3年）16分18秒51
▽100㍍平泳ぎ　③森圭佑（4年）1分1秒58
▽4×100㍍フリーリレー　②大体大（武田、村田勇輝、泉大雅、北村祥瑛）3分23秒53＝大会新
▽4×200㍍フリーリレー　③大体大（木倉颯太、友田和志、泉、武田）7分38秒78
▽4×100㍍メドレーリレー　③大体大（辻本瑞樹、森、友田、武田）3分44秒80

【女子】
▽50㍍自由形　①河岸凛子（4年）26秒36
▽100㍍自由形　①新山くるみ（4年）58秒36
▽200㍍自由形　③青山美咲（3年）2分6秒13
▽100㍍平泳ぎ　②戒能朝陽（4年）1分12秒07
▽200㍍バタフライ　③新井はる佳（3年）2分16秒60
▽200㍍個人メドレー　②枡井萌（2年）2分19秒43③青山2分19秒91
▽400㍍個人メドレー　①枡井4分58秒35②山村莉子（2年）4分59秒48
▽4×50㍍フリーリレー　①大体大（河岸、新山、水谷楓、新井）1分46秒81＝大会新
▽4×100㍍フリーリレー　①大体大（青山、山村、新山、河岸）3分52秒40
▽4×200㍍フリーリレー　②大体大（枡井、山村、井上紗奈、青山）8分29秒19

宇津木、世界6位

世界パラ水泳選手権大会

水上競技部女子の宇津木美都（現教育2年）は3月、2022パラ水泳春季記録会兼2022マディラ世界選手権日本代表選手選考会に出場し、100㍍平泳ぎ（SB8）で1分28秒86をマークし優勝。派遣標準記録1分29秒07を突破し、世界パラ水泳選手権大会の日本代表に内定した。

宇津木選手は昨年の東京パラリンピックでも同種目で6位入賞した。

世界パラ水泳は6月、ポルトガルのマディラ諸島で行われ、宇津木は100㍍平泳ぎ（SB8）の予選を全体で6位の1分30秒17で突破、決勝では1分30秒31で6位に入賞した。

また、混合400㍍メドレーリレーは予選で5分7秒03で9位、混合400㍍フリーリレーは決勝で4分38秒11で9位だった。

アダプテッド・スポーツ部

ボッチャ

第23回日本ボッチャ選手権大会

内田、初V

豊田市で行われ、アダプテッド・スポーツ部の内田峻介（現教育2年）がBC4クラスで初優勝した。内田は決勝で、東京パラリンピック代表で3連覇を狙う江崎駿選手と対戦し、6―0で勝利した。

目指すは2年後のパリ・パラリンピック

内田は山口県立山口南総合支援学校中学部2年からボッチャに本格的に取り組み、中学3年だった2017年、国を挙げた有望選手の発掘事業「ジャパン・ライジング・スター・プロジェクト」1期生に。同校高等部1年の2018年、日本選手権で準優勝した。

2021年4月、大阪体育大学教育学部に入学。アダプテッド・スポーツ部に所属している。

試合後のインタビューでは、「厳しい戦いだったが、しっかり1球1球を大切にして決めるところは決めて投球できたので、それが優勝につながったと思う。東京パラリンピックでは出場できずとても悔しい気持ちを味わったので、次のパリ・パラリンピックやその次を目指して頑張っていきたい」と涙ぐみながら語った。

また、ボッチャ日本代表の強化合宿が4月末から3日間、本学の第6体育館で行われた。内田は東京パラリンピックBC2クラス金メダルの杉村英孝選手らとともに参加し、「尊敬している杉村選手と一緒にプレーできる機会なので、良いところを吸収できるように学びたい」と話した。

世界陸上いってきます

OREGON2022

岩崎立来

現役男子学生初

陸上競技部

陸上競技部の岩崎立来（体育4年）が、オレゴン2022世界陸上競技選手権大会（7月15～24日、米国オレゴン）の男子4×400メートルリレー、混合4×400メートルリレーの日本代表に選出された。また、3月に本学を卒業した武本紗栄（佐賀スポーツ協会）は女子やり投げで選ばれた。ともに初選出だ。本学現役学生の世界陸上出場は男子では初、女子を含めても1991年の北田（現岩本）敏恵以来となる。

岩崎は6月、大阪市・ヤンマースタジアム長居で世界陸上代表の選考を兼ねて開催された第106回日本陸上競技選手権大会の400㍍で46秒24をマークし5位入賞。それまでの実績と合わせて評価され、リレー2種目での代表入りが決まった。「うれしさと緊張が半々の気持ち。自分のベスト以上の走りが出来るようにしっかりコンディションを整えて臨みたい」と意気込みを語った。

奈良県立奈良情報商業高入学後に、陸上競技をしていた兄の影響で本格的に陸上の世界に踏みだし、400㍍でインターハイにも出場した。

大阪体育大学入学後も実力を伸ばした。飛躍の年は2020年。日本学生陸上対校選手権大会（インカレ）の400㍍で初出場ながら8位に入賞。翌2021年の関西学生チャンピオンシップの400㍍で優勝、静岡国際も5位。日本インカレでは、男子400㍍では本学勢初の表彰台となる2位に入った。本学の男子短距離としても29年ぶりとなる快挙だった。

2022年も勢いは持続し、4月に神奈川県であった日本学生陸上競技個人選手権大会の400㍍で46秒47を記録し優勝。強い風雨の悪天候と自身のコンディション不良にも負けず、「スタートからゴールをする最後まで気持ちよく走り抜けることができた」と振り返った。

自身初となる学生日本一に輝き、FISUワールドユニバーシティゲームズ（旧ユニバーシアード、6～7月、中国・成都）の日本代表に内定。「納得できる走りをしたい」と意気込んだが、大会は新型コロナウイルスの影響で延期が決定し、代表選手の選考も再度行われることとなった。そんな状況での今回の世界陸上代表への選出に、関係者から祝福の声が相次いだ。

また、武本は兵庫・市立尼崎高校から本学へ。体育学部4年だった昨年9月、日本インカレで59㍍90をマークし初優勝した。ワールドユニバーシティゲームズの代表にも内定したが、大会は延期に。6月の日本選手権では60㍍84で3位と健闘し、いったん手放した世界への切符を再び奪取するかたちになった。

武本紗栄

本学OG（今春卒業）

持てる力発揮、メダルラッシュ

第99回関西学生陸上競技対校選手権大会

陸上競技部は5月25～28日にたけびしスタジアム京都で開催された第99回関西学生陸上競技対校選手権大会で、6種目で優勝。5種目で2位、5種目で3位に入った。

また、大会全体として、フィールド得点は男女共に1位、男子1部総合得点は2位、女子総合得点は3位の素晴らしい成績を収めた。

体大生、躍動

投擲は体大生が躍動した。男子はハンマー投げで吉田明大（大学院）が63㍍70で関西インカレ2連覇。森下海（体育3年）が63㍍28で2位に入り、新崎匠真（体育4年）が4位。砲丸投げでは、下浦大輝（大学院）が15㍍87で2位に1㍍以上の大差をつけて3連覇した。前川純太（体育4年）が14㍍35で3位に入り、黒田翔貴（体育3年）が8位に入った。やり投げでは、末次仁志（体育4年）が69㍍30で優勝、須藤勇大（体育1年）が69㍍18で2位、上村壮吾（体育2年）が68㍍76で3位と大体大が表彰台を独占した。

女子は、ハンマー投げは全体的にレベルの高い戦いとなった中、竹谷陸（体育3年）が54㍍76の自己ベストで3位、五十川利心（教育3年）も54㍍70の自己ベストで4位に入った。また、坂本日和（体育4年）が6位。円盤投げでは、中瀬綺音（体育3年）が44㍍72で関西インカレ3連覇。渡部舞（体育4年）が42㍍29で2位、大西愛莉（体育2年）が41㍍11で3位と大体大が表彰台を独占した。また、砲丸投げでも、岩本真波（体育3年）が13㍍99、山本佳奈（体育3年）が13㍍87、中瀬綺音（体育3年）が12㍍99で1、2、3位。やり投げでは、表彰台は逃したが、小林鈴奈（体育4年）が4位、浦尾凜（体育2年）が6位、川合小想（体育1年）が7位に入った。

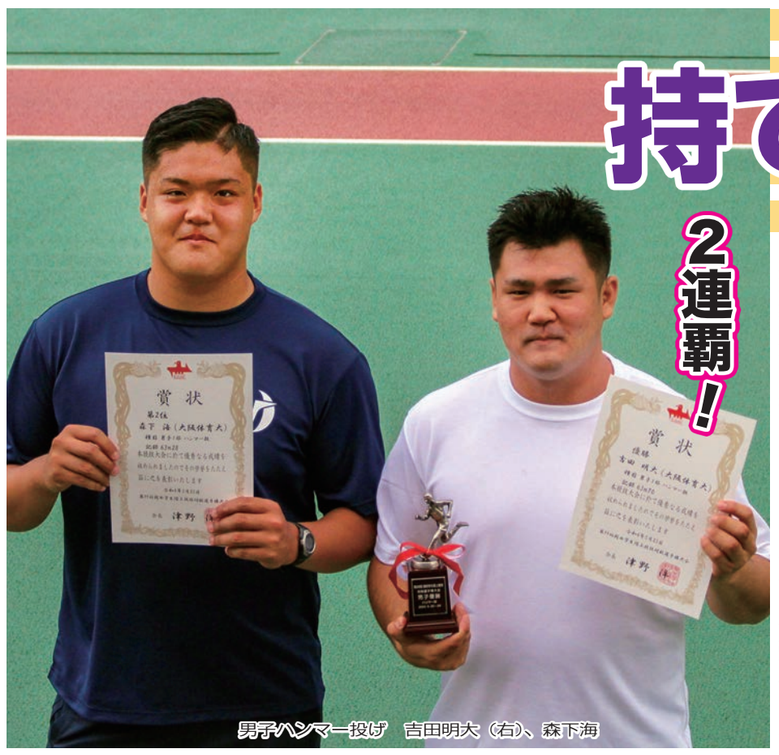
植木章三投擲コーチは、「今大会では、自分の持っている力を発揮した選手が多かった。初日の女子ハンマー投げで竹谷と五十川が自己ベストを出したことがきっかけでチームにも勢いがつき、他の選手にもいい影響を与え、好成績につながった」と話した。

好成績連発

また、トラックや跳躍でも本学勢の活躍が目立った。

男子では、400㍍は、岩崎立来（体育4年）が46秒20と昨年よりタイムを縮め、2連覇。岩崎拓生（体育1年）が5位に入った。十種競技では、成松遼（体育4年）が総合得点6943点で優勝し、中島貴心（体育4年）が6位に入った。三段跳びでは、丸山圭太（体育3年）が15㍍52で2位。100㍍では、萩尾脩人（体育2年）が7位、走り高跳びでは、大川海翔（体育3年）が4位、棒高跳びでは、山口悠登（体育1年）が7位に入った。

女子は、800㍍で原華澄（体育3年）が2分8秒61で3位に入った。100㍍では、坂野七海（体育4年）が8位。七種競技では、和田真琉（体育4年）が4位に入った。走り高跳びでは、和田が1㍍70で2位、森岡未優（体育2年）が8位に入った。



2連覇！

男子ハンマー投げ　吉田明大（右）、森下海

400㍍優勝の岩崎立来（左）、5位の岩崎拓生

女子砲丸投げ　岩本真波

3連覇！

女子円盤投げ　中瀬綺音（下）、渡部舞（左）、大西愛莉（右）

女子ハンマー投げ　竹谷陸

やり投げ　末次仁志